

罪に死に、義に生きる

ペテロの手紙の2章18節以下は、家庭訓とよばれています。社会の最も小さな単位である家庭のなかで、キリストに召された者はどのように生きるかということがまず召使いたちに、つづいて妻と夫に向けて語られてゆきます。それはキリスト者として、教会の外でどのように生きるかという大切な問題だと言ってよいでしょう。

人間は社会的な動物だといわれます。爪や牙をもたない人間は単独では命を維持することは困難であり、群れを作り、集団で生きることが「ヒト」という生き物の生存戦略でした。人間の長所はその組織力とそこから生み出される知恵や力の集合にあったわけです。しかし、そのように群れを作って生きるためにはバラバラの烏合の衆にならないために集団の決まり、つまり法律といった集団を律するルールや、集団をまとめるリーダーが必要になってきます。こうして人間が生きる以上、権力と権威、支配と服従の問題がつねに起きてくるわけです。これをいちばん小さな社会の単位としては家族で、学校で、職場で、地域のなかで、さらには国、そして国際社会で調整してゆくことが人間に求められます。それが政治ということになるのですが、政治とは言ってしまえば力を扱う仕事です。法律を作る。お金を集めて分配する。そうやって集団を維持運営してゆく。そこには従わない人を指導したり、さらに反社会的行動をする人を罰したり、たがいの主張を聴いて落とし所をさがしたり、さまざまな働きが必要になる。それを王様がするのか、政府がするのか、その政府というのも民主的な手法で選ばれた代議制なのか、軍が武力を背景に実験を握るようなやり方なのか、どこまで情報が開示され、みなに参加できるのかなどなど、地球全体を見渡してもさまざまなレベルのありかたがあって、いちがいにこのやり方が一番だと押し付けることが難しいことがわかってきています。世界史をな

がめると19世紀以降の約200年で、現代社会のベースである資本主義とよばれるシステムと、それにもっとも都合の良い政治体制をつくりあげたヨーロッパ、キリスト教国が、アジア・アフリカ地域を植民地化してゆきました。先頭をきって近現代の社会体制に突入したのが西欧であり、それを支えたのがキリスト教であり、そこから生まれてきた民主主義的な価値が人類普遍であると信じられて、それが輸出されてきましたし、人間社会を統治するためのもっとも良いシステムだと考えられてきたのです。そして、この観点からすると、イスラム文化圏や、中国、あるいはヨーロッパの辺境といいロシアなど、独自の宗教、伝統、統治方法をもってきた社会とぶつかり合うところもある。その意味で世界はますます混沌としてきたし、西欧的な価値観を絶対のものとして、相手を断罪するような仕方は、かつての十字軍のような文明の衝突からくる破局を生み出しかねない。とくに核兵器という地球環境そのものを永久に破壊し、文明を終わらせてしまう武器を大量に抱え込んでいる現状は、世界終末時計が100秒前を指しているという事態も含めて、きわめて深刻な事態に陥っているのが現状だと思います。しかも一方でシステムが巨大になりすぎて、自分がその一部であることの実感も持てない、当事者意識が育たないという意味においても本当に難しい時代に生きていることを思わされます。ただ13節に「主のために、すべて人間の立てた制度に従いなさい。それが、統治者としての皇帝であろうと、あるいは悪を行う者を処罰し、善を行う者をほめるために、皇帝が派遣した総督であろうと服従しなさい。善を行って、愚かな者たちの無知な発言を封じることこそ、神の御心だからです。」と書かれていますのは、以上のような意味において、権威と権力がもたらす秩序の下で人間の生活は営まれるものであるし、それが必要不可欠なものだということなのです。すると、わたしたちの疑問はそうは言うけれども信仰者を迫害し、殉教に追い込むよう

な権力者はどうなのかということですね。このことは少しずつふれたいと思いますが、すべての権威と力はみな本来は神のものであることが大前提です。国と力と栄とは限りなく汝のものなればなり、と祈られる通りです。神こそが歴史の創造者であり、完成者であり、あらゆる被造物を裁かれる方だからです。地上の世界は永遠ではないのです。「離散した仮住まいの人びと」であり、「寄留者」であるということは、わたしたちがもつ力も権威も居場所もすべては一時、貸し与えられているものに過ぎないということなのです。

さて、困ったときには原点に立ち返ること、基本に帰ることです。わたしたちの場合、原点は神さまとの関わりですから、御言葉に立ち返って考えることですが、今日のような箇所は非常に扱いにくい箇所であることもおわかりいただけたと思います。しかし、まず大切なことは、こういう勧めがなされるのはどうしてなのか、そのように勧められる根拠が何であるかを知ることです。ややこしく見えるときには因数分解というか、わかるものに分けてみることです。そういう意味で考え方の枠組みとなる信仰告白や使徒信条、十戒や、主の祈りといったものはとても大切です。わたしたちは神さまから貸し与えられた一度限りの二度と繰り返すことの出来ない命を生きています。だからペテロは2章11節でも、「愛する人たち、あなたがたに勧めます。いわば旅人であり、仮住まいをしている身なのですから」と、わたしたちは天を故郷とすることで、土地のつながり、血の繋がりに囚われ続けるこの地上の価値から切り離されている。真に自由な存在へと、あなたはキリスト・イエスによって作り変えられている、それをキリスト者の土台に据えるのです。キリスト者は、この世が神の御心に背いていることを知っています。利用価値のあるものとしてキリスト教を扱いますが、その本質にふれようとはしません。クリスマスが商売や気分として毎年消費されてゆくものと同じです。皆さんの中には「クリスチャンのくせに」と言われたことが

ある人があるかもしれません。これはキリスト者に対するイメージがあつて、それと比べてお前はということでキリスト教に対する高い評価のあかしと思うべきなのか、自分の思うように相手を動かしたくて、そうはならなくて悪態をついているのか、いずれにせよ、わたしたちが組織の中で、それが家庭であれ、職場であれ、そこで「不当な苦しみを受けることになっても、神がそうお望みだとわきまえて苦痛を耐えるなら、それは御心に叶うことなのです」とペテロは、キリスト者の生き方を語るのです。「善を行って苦しみを受け、それを耐え忍ぶなら、これこそ神の御心に叶うことなのです」と勧めるのです。そしてそれらすべては「キリストもあなたがたのために苦しみを受け、その足跡に従うようにと模範を残されたからです。ののしられてもののしり返さず、苦しめられても人を脅さず、正しくお裁きになる方にお任せになりました。そして、十字架にかかって、自らその身にわたしたちの罪を担って下さいました。わたしたちが罪に対して死んで、義によって生きるようになるためです」。このキリストの生きざま死に様が、わたしたちが僕として生きるための根拠です。正しくなかったわたしのために、キリスト・イエスが、十字架にかかってくださり、そこで神の正しさと愛が明らかにされた。神の義と神の愛が、キリスト・イエスの消息のなかには充満している。この恵みに与って生きることを願われている。わたしたちが世の中と同じかたちをとって、自分で復讐を始めたりするならば、それは相手と同じ土俵に降りることであり、キリストが示してく下さり、わたしたちを招いていることから外れてゆきます。わたしたちは洗礼によって罪を赦され、キリストに所属する者となりました。あなたがたは羊のようにさまよっていましたが、今は、魂の牧者であり、監督者である方のもとへ戻ってきたのです、とペテロは喜びをもって告げています。人間を超越する神の正しさを現してく下さり、わたしたちを罪と死の支配から贖い取って下さった方のもとで、その方の模

範に倣って生きる道を歩んでゆく。それが「神の僕として生きよ」という招きとなるのです。そしてそれは神様のことを知らない世の人びとの間においては、小突き回されるに等しい歩みを受けることかもしれません。佛の顔も三度まで、と思うこともあるでしょう。しかし、主イエスは、ペテロから兄弟が自分に罪を犯した場合、何度赦したらよいかと問われたときに、ペテロは頑張っただけで7回でしょうか、と言うのですが、7を70倍するまで赦しなさいという答えを与えています。これは490回までゆるして、491回になったらブチ切れていいということではありません。完全数である7を70回ということですから、赦しには制限をもうけない。赦しとは回数ではなく、関係がキレないということなのです。イエス様は、わたしたちがどのような状態であっても離れられることはありません。罪人のために十字架にかかれたとはそういうことです。この方の憐れみから離れるすべはないのです。罪人を救うために来られた主に愛され、生かされているということから選び分かれてキリスト者とされた者たちにとっては、王の系統を引く祭司としての自覚を持って、神と人との間の執り成しをする。そのために異邦人の間で立派に生活しなさいという勧めがなされる。キリスト者への理解のない世界で、場合によっては敵意すら向けられることのある世界で、自分の十字架を背負ってキリストの生き様を見据えて歩んでゆく。それは罪に死んで義に生きるのですと言われるように、わたしたちはキリストにあって罪の、つまり、古い自分のありかたを十字架に釘付けにして処分して頂いた。だからキリストの正しさにならって生きるように招かれている。そのことを覚えたく思うのです。わたしたちが見聞きし、体験するこの世界の現実には、体制によっては上に立つもの暴虐であったり、日本社会ではさまざまなハラスメントであったり、社会的な歪みは弱い立場のものに向けられるのですから、そうしたことに対して、キリスト者は頼りかむりをするのかという批判を受けることもあるでしょう。

むしろ戦えという声もあがるでしょう。しかし、相手と同じ土俵に立つのは敗北なのです。善を持って悪に勝ち、罵られても罵り返さず、苦しめられても人を脅さず、正しくお裁きになる方にゆだねられた主イエスを模範としたいのです。

今年もまもなく終末主日を迎えます。ちょうど一ヶ月後ですね。わたしたちの命が終わりになる時が来る。世が裁かれる時が来る。だれもが主の前に生きてきたときの実りを携えて立つ、収穫感謝の時が来る。この手紙を受け取った人びとは非常に差し迫った終末理解をもっていたことが知られています。創造主である神が終わりを取り仕切り、完成されるという希望は、主の再臨と呼ばれるテーマです。これが時代を経るに連れて、もう来ないんじゃないか、少なくとも自分の生きているときには来ないだろうとなってゆく。こうなると現在と主の再臨のあいだの期間がこの世に絡め取られてゆく。仮の宿りではなくなってしまう。すると、この地上のことを全部自分で解決しなければなくなってゆく。それはもうキリスト者としては敗北ですね。この手紙は、わたしたちに、自分たちのことをこの世においては寄留者であることを自覚させ、そして復活の生ける望みをいだかせ、終わりの勝利は神のもとにあることを告げている。この終わりから現在を見る視点を養うこと、取り戻すことが大切なのだと思います。わたしたちキリスト者の集まりである教会も、家庭や、それを取りこむ大きな社会と対峙しています。そこでわたしたちは神の僕として歩んでゆく。くりかえし罪に死に、義に生きることを学びながら、魂の牧者であり、わたしたちを命の道へと導く監督者である主イエス・キリストに導かれて歩む。この消息をご一緒に確認して、それぞれの持ち場へと送り出されたく願っています。

お祈りいたします。